

## 校長と校醫を兄弟で

### 昭和前期の千二に盡くす

編集部

(文中敬称略)

小寺治雄・末廣榮和しげかず両先生が逝去されて久しい。戦前の生徒は、小寺校長をすっかり臉の中に残していることだろう。そして実弟末廣先生は、千里山会々員のほとんどの方々が在校した頃、校医をお務めになられていた。

末廣先生は大學を卒業されて、千里山住宅の開発間もない大正後期に開業されたので、兄上よりも早く千里山住宅の住人になられたと思われる。小寺校長は昭和八年の世帯主一覽(第十九区の三四四番地)に載っているので、校長着任(昭和五年)の頃には住宅内に住んでおられたと拝察する。

両先生は隣の新田のご出身である。新田は、季節の果物をなんでも栽培していたから、これらに恵まれて

育った私共にとつて懐かしい処である。

両先生を懐かしみ思い出しながら、小寺家とお二人のご生涯を辿ってみようと思う。

#### 小寺家

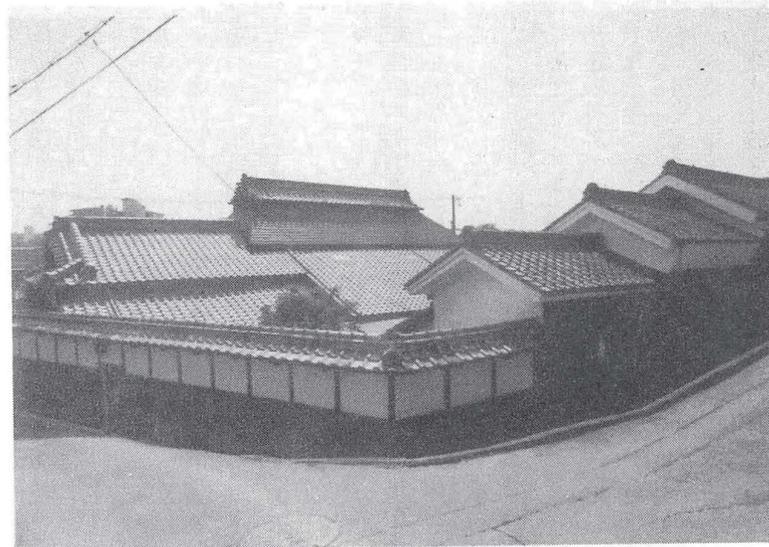
小寺家は嘗て多くの田畑をもつ新田村の地主の家系であった。屈指の名家でその旧家は今も保存され健在である。古文書や過去帳から天保年間には太鼓の胴を扱っていたことから「胴屋」の屋号を持っていた時期がある。

両先生の父上榮次郎は、明治時代(一七年〜三二年)に三島郡新田村立新田小学校校長を務めた。地主の傍ら教育一家だったようで、長男治雄と三男三郎は教師として生涯を全うされている。次男榮和は医師の道を選び末廣姓を、三男は清水姓を継いでおられる。

治雄の長男である跡取り忠雄は四年前に没し、配偶者で九三歳になられる小寺清枝に最近こんなことがあった。小寺家の土地の一部から窯跡と土器の破片を家族が発見し届けたところ、大阪府教育委員会から六世紀の甕棺と鑑定されたことが清枝に通知された。それは「櫻井谷2-32号窯跡」と命名されたという。この



小 寺 家 玄 関



小 寺 家 全 景

たび治雄の直孫に当たられる現在のご当主小寺忠宏からこれまでのお話を聞かせていただきながら、戦後から最近の小寺家のことをお話いただいた。

地主で男衆、女衆をかかえていた当家も、戦後農地解放で多くを手放し、その後、周りが千里ニュータウンとして開発され、往時の面影なく今はひっそりと息づくのみ、昨年（平成十七年）残った土地の一部より、須恵器窯跡が見つかった。古代を彷彿とさせる出来事だが、いかにしてこの土地に伝わったのか、今は知る人もない。せめて百数十年は経つと思われる家屋と、二体のお地藏様と、この窯跡は、このままそつと後生に伝えていきたいと願っている。

### 新田小学校

両先生は明治時代の新田小学校を卒業されておられるので、この歴史ある名門校を知っておきたい。

明治五年（一八七二年）に学制が布かれ、その直後に村内の眞覚寺を借りて呱呱の声を挙げています。これは寺子屋ではない。明治八年小学校として独立、明治十五年にお寺から村の共有建物に移り、明治三十年（一九〇〇年）に新築校舎が建設された。現在大阪府指定文



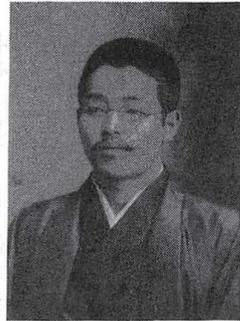
櫻井谷2-32窯跡 土器破片

化財（有形文化財建造物）となっている。

近年の住宅ブームで、昭和四七年（一九七二年）に〇〇周年を期して、主要部を当時の位置（御堂筋線桃山台駅徒歩八分）に残し、新田小学校は千里中央駅近くの鉄筋校舎に移転している。旧建物は現在豊中教育委員会社会教育課文化財保護係が管理している。明治の小学校建築といえば、洋風の松本市の開智小学校が有名で、新田小学校のような純和風色の強い校舎はあまり問題にされない風潮の下に置かれているので、豊中教委もその存在意義に力を入れている。

## 小寺治雄校長の足跡

明治三十二年二月一日、三島郡上新田村に生まれる。  
新田小学校、大阪府立茨木中学校(九期生)、明治四二



年天王寺師範学校(現  
大阪教育大学)を卒業、  
大阪市内及び三島郡  
下の小学校に勤務し、  
大正十四年吹田尋常  
小学校訓導を経て、

昭和五年四月創立一年後の千里第二尋常小学校に  
二代目校長として着任し、十五年高等官六等待遇、  
十六年三月まで十一年間、教育指導に当たると。

その間、千里山幼稚園の園長も兼ねておられました。  
遠足には必ず随いて行かれ、温顔を湛えておられる写  
真が多く残っています。(会誌八号七〇頁)

その十一年間は、着任の翌昭和六年満州事変勃発、  
その翌七年五・一五事件、六年目十一年二・二六事件、  
その翌十二年支那事変勃発、そして日米英開戦直前の  
十六年三月までの、国粹思想による支那膺懲の最悪の  
時代の中を務められました。在任中の後半は、父兄と

の一体教育を進めるための全教師参加によるコミュニ  
ケーション誌を発刊し、離任の直前まで続けられまし  
た。その中の一稿「躰」を掲載いたします。

### 躰

這へば立て、立てば歩めと親の愛は誠に限りない  
ものである。己れ生ある内は子の身に代はらんこと  
を思ひ、己れなき後は子の身を護らんことを願う。  
少しの身勝手も思はず唯我子良かれとのみ願い続け  
るのが親である。



然し之のみで親が期待  
する様な躰が出来るで  
あらうか、たゞ可愛々々  
の単なる愛であつては  
いけない。子供を愛の手  
に抱くと共に一面子供より尊敬さるゝ親でなければ  
ならない。親はとかく己れの言行を問題外として子  
供を躰ようとするが見様によつては子供は親の鏡で  
あり、家庭の鏡である。

子供の短所、缺点を見出し之に矯正を加へんと  
する時親の何所かに、家庭の何れかに子供を其處に

到らしめた原因のひそむことを自覺し、子供を教ふる  
と共に己れを修め親子共々の向上を祈つてこそ其の一  
言一行は子供の精神奥深く染み込んで子供の一生を指  
導する堅き々々信念とするのである。うつろな教訓御  
座なりの叱責は無駄であり時としては将来に害毒さへ  
残すことがある。親として終生身を以て躰に當らるる  
人こそ子供に尊敬さるゝ親であり、かくしてこそ限り  
なき愛も良果を結ぶ所以である。

(昭和十三年二月 ちさと第四号)

昭和十六年四月から吹田第一国民学校長を二年間  
務められ、昭和十九年従六位受賞、吹田図書館長、大  
阪司法保護委員、吹田市役所民生部長、父榮次郎に次  
いで新田村々長をなされ、昭和四十二年十月十一日、住  
み慣れた家でご生涯を終えられました。享年七十八歳。

## 末廣榮和校医の生涯

明治二十七年一月二日、小寺榮次郎・ステの次男とし  
て生まれました。小寺家が江戸時代からの新田村の名

家で胴屋の屋号を持っていたことは始めに述べました  
が、屋敷内に古い薬箆筒があり、そこに生薬や聴診器、  
秤などが残っているところから、漢方薬や医療器など  
も扱っていたと思われる。



次男榮和が医業を志すに相  
応しいご家系であつたこと  
が判ります。  
この度の企画に際して、  
千里山会々員である息女  
馬場郁子に父上の回想を

お願いしましたところ、先生の生い立ちから、お人柄、  
逸話など寄稿していただきましたので、原文を掲載い  
たしました。ありがとうございます。

### 父のこと 思い出すまに

十五回生 馬場 郁子

(末廣)

上新田の小寺三兄弟の次男として生を受けた父は、  
新田小学校から、茨木中学、阪大医学部へ進み、阪  
大の医局勤務の後、拓けたばかりの千里山住宅地で、  
内科、小児科医院を開業しました。

(その頃、後継のなかつた医家末廣家と養子縁組をして末廣姓となりました)

千里山の地で約五十年に亘り開業医をしながら千里第二小学校の校医として約四十年間児童の保健に携わりました。校医としての父は学校行事の春の身体検査、秋の運動会や六年生の伊勢参りの随行等をととても楽しみにしていました。中でも運動会の自転車遅着競争は得意種目でいつも一着だった思い出があります。

若い頃は往診に自家用車を使っていたので住み込みの運転手さんが居た時期もありましたが、やがて彼らも戦地へと出征してゆきました。父はおとなしく控えめな人でしたが、最初に買った車は、モータース社のオープンカーだったと昔を知る方から最近聞き、父の意外な一面を知ることが出来ました。

戦争が激しさを増すにつれ車もなくなり、次ぎに大型オートバイを買ってキャシヤな体に革の長靴をはいて新田、佐井寺、花壇町辺りまで往診していました。しかし、そのオートバイさえも消防団から貸



してほしいと言われて提供して頂きました。その後は自転車か徒歩でしたが坂の多い千里山ではさぞ大変だったと思います。そんな辛い時代ではありましたが、時折患者さんのお宅で頂いた半紙に包んだお菓子をポケットからいくつも出して渡してくれたことは子供にとって楽しみなひとときでした。あの頃の開業医は今とは時代もちがってお正月三

ヶ日以外は年中無休、日曜日、祝日も午前中は開院し、朝九時から夜九時迄、急患は夜中でも診ていましたし総合病院も近くに無い為、外科や眼科、耳鼻科なども診ていました。私用で出掛ける時でさえ聴診器と消毒用アルコール綿をいつもポケットに入れていました。

一日二十四時間医者であったのだと思います。科学者であった父ですが、座右の銘は「鬼手佛心」朝夕神仏に手を合わせる信心深い所も有りました。因果応報という事もよく言いかされました。

父の毎日の安らぎは仕事後にほっと一息ついで晩酌だった様です。かど三(赤壁薬局横の魚屋さん)が持つて来てくれる白身の刺身に日本酒を一献傾け

るのがお決まりで、ささやかな楽しみだったようです。一町医者として生涯患者さんや家族の為に働き続けた父に、亡くなって三十数年経った今でも尊敬し感謝しています。

編集部に会員から寄贈していただいた千二小の「四十年のあゆみ」(学校とPTA共編)に稀少な末廣先生の回想談「創立当時の二三の思い出」が載っています。校医として修学旅行に随行したくだりの一端をお載せして末廣先生を懐想したいと存じます。

(前略)昭和五年から始まった天橋立、若狭高浜、和歌の浦片男波での臨海学舎等、その他様々の思い出はあるが何と言つても生徒達が一番待ち望んで居たのは年中行事の伊勢志摩見学旅行であろう。昭和の初め頃には未だ今日の様な特急参宮電車も出来ておらず、国鉄により京都・柘植(註)回りの鈍行列車によらなければならなかった。当時の生徒には鈍行で長く乗り、長く外の景色を楽しむのが嬉しかった様であった。

柘植の駅で先生方の昼食弁当を買う為ホームに降りた用務員の中村さんが、どうした事か発車の間際

になつて数個の弁当を取り落とした。之を回収しようと懸命の中村さんを諦めさせて、列車に飛び込んだ時はもう列車は動き始めて居たスリルもあった。旅行中一番閉口させられたのは雨降りと急病人が出来ることである。或る学年は学校出発の時から帰校するまで降りつづけて、充分に見学も出来なかつた残念な事もあった。病人と言つても大抵は乗り物酔か、おやつを食べ過ぎによる胃腸病で一晩静養すれば翌日は元気になり、皆と行動を共にする位のものである。

然し先生方は生徒の健康状態を心配されて、一晩中時間交替で見回りをしておられる。誠に御心労な事と頭がさがる。

過去二回ほど夜中に喘息の強い発作を起こした生徒が出来て随分と心配させられたが徹夜の看護で大事に至らず発作も軽減したので皆と共に帰阪、父母の手に届けてやっと安心したこともあった。(後略)

(註)柘植駅：草津線と関西本線の乗換駅 三重県伊賀地方。

末廣校医は、昭和四七年一月七日 永眠なされました。享年七八歳。

おわりに

小寺校長のご在任期間が十五年戦争(昭6～昭20)の大半にあたりますので、四大節に奉安殿から御真影を出される所、教育勅語を読まれる時の姿は謹直そのものでしたが、運動会の時にテントの中で、救急箱の前の末廣先生とニコニコ笑って座っておられた情景は平和そのものでした。

末廣先生は小寺先生の四倍の年数ですからお懐かしさも一入です。往診で自転車を押して坂を上って行かれる後姿、ゆっくりした聴診のあとコツコツと胸や背中を叩いてもらった感触が蘇ってきます。

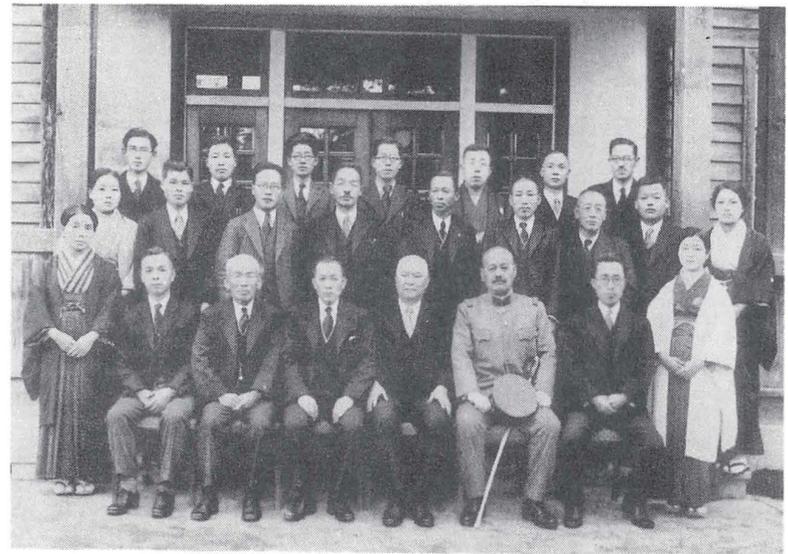
「かえったらお番茶でよくうがいしなさい」「おかいさんと梅干にしときなさい」当節聴けないお言葉です。今があるのも恩師のお陰です。

両先生に感謝しご冥福をお祈り申しあげます。合掌

小寺忠宏様(ご当主直孫)には、古今の小寺家と新田の情報・写真等のご提供、心から御禮申しあげます。

在阪の十五回生森田千里氏には、ご当主との取材、諸資料収集、母校での調査等、感謝申しあげます。

(文責 柿崎)



昭和11年3月撮影 中列 左から4人目 小寺校長 後列右端 末廣校長